

三月の觀察

堀 七 藏

三月になれば漸く春らしくなり、自然物が一般に生々々氣に満ちて来る。今まで堅く閉ぢてゐた植物の芽は、次第に大きくなり、青味を加へて来る。椿、梅、櫻、桃の如き、花の蕾と葉の蕾との判然してゐるものでは、著しく花の蕾が

成長して開花するものである。葉の芽も鱗片の間から青々した新葉が出かけて来る。桃は雛祭に必ずそなへられる花であるからよく觀察させるがよい。また梅の花でも二月から三月にかけて満開であり、比較的に花期が長いから觀察させるに便宜が多い。梅の花と桃の花とごんなに異なるかを比べさせるのもよい。又つばきの花も三月には満開の地方がある。かゝる地方ではつばきの花の觀察も至極よい。

總じて三月には植物の觀察では新芽の成長變化に注目させるがよい。勿論チューリップ、ヒヤシンスの如き球根類の花を觀察させることもよい。またつくしや、草花の芽が

土中から伸出する有様をよく觀察させることも結構である。所謂二年生植物又は多年生植物の觀察を行はせると共に、一年生植物の種子をまいて、幼児にも行ひ得る栽培の準備を行はせることも適切である。

二

冬の寒い間、冬眠状態にあつたいろいろの動物が、三月になるに冬眠からさめて活動を始めるものであるから、その觀察をも行はせねばならぬ。蛙の卵を採集飼育してその發生を觀察させるもよい。また鮒や鯉や金魚の生活状態を觀察させるもよい。また雀や烏、鶯等の鳥類につき觀察させる機会があれば勿論それもよい。尚ほがん、かも、かもめ、さぎ、しぎ等の鳥類を觀察させるもよいのである。

三

凡て保育項目の觀察では、幼児の環境に於て幼児の生活内容を形づくるが如き事物現象をよく觀察させることに努

めねばならぬ。幼児の環境に於て豊富に存在し、幼児の視聽をひくものはこれを材料として觀察させることが肝要である。幼児の時代にはいろいろの事物現象の個々のものを觀察するものである。事物現象相互の關係なごを考察することは幼児時代には全く出来ない。幼児は所謂統覺作用が十分發達せず、個物期にあるのであるから、個々の事物現象をよく觀察させて、その觀念内容を明白にさせることが

幼稚園時代に於ける觀察の主要な領域である。従つて幼稚園に於ける觀察では、個々事物現象そのものをよく觀察させることを本體とし、事物相互の關係なきについて深入した説明をなすことは禁物である。殊に抽象的な概念を授けるが如き理科的説明を觀察に加へてはならぬ。故に幼稚園に於ける觀察の材料は月々必ず變化せねばならぬことはない。同じ物を數回觀察させても差支ないばかりでなく、却つてその方が望ましいのである。二月に觀察した梅と三月に觀察する梅と、同じく梅であつても、その觀察材料となる梅に相違がある。假りに觀察材料たる梅が同一であつても、その梅は二月と三月とに大なる變化があるのであ

る。盆栽となつてゐる一鉢の梅でも、二月と三月とに成長變化があるのであるから、同一のものを殆ど毎日のやうに觀察させても一向に差支ないばかりでなく、眞の觀察よりいへばその方がよいのである。

生物の變化に注意して觀察させることが肝要である。昨日と今日とみんなに變化してゐるか。一週間前と今とみんなに變化してゐるか、幼児の注意を喚起して觀察させることが肝要である。唯毎日同じものを觀察させて居れば、注意をひかなくなるから、適當に兒童の注意を喚起し得るに足る變化がなくてはならぬ。その變化が著しいときは、全然幼児の觀察に任せて置いても變化に注意するものである。

しかし變化が幼児の注意を自然に喚起するに足りぬ場合には、「このところがみんなに變つたか」といふが如き疑問を提出して、幼児の注意を喚起させることも肝要である。

兎に角觀察の材料は専ら幼児の心理の變化に順應して選擇せられねばならぬ。幼児の興味を喚起するものを主として選擇すると共に、自然の變化に適應して觀察の材料が自然に變化すべきものである。年々歳々同様の材料を觀察さ

せても幼児の發達が異なるに應じてその觀察の結果に相異がある。故に小學校の教科課程に於て年々一定の教材を指定するが如きことは、幼稚園の觀察材料に於て全く必要でない。第一年の保育に於ける觀察材料はこれく、第二年の保育に於ける觀察材料はかくく、規定したり配當したりする必要はない。小學校に於ける理科教材排列の如く、幼稚園に於ける觀察材料の排列をなす事は甚だ面白くない。

この精神に基いて段々各月の觀察について説明したのである、今まで四月の觀察、五月の觀察ミ、それく説明してこゝに三月の觀察を終るに當り、特に小學校に於ける教材の學年配當をなすが如き精神ではなく、唯月々に於て幼兒の環境に變化があるから、その變化に順應して觀察材料が異なるべきこゝを説明せるものである。即ち幼稚園に於ける觀察の材料は年々變化するこゝを必須の要件ミなすものではなく、年々同一物を反復して觀察させるこゝによつて、幼兒の發達に應じ幼兒の環境を構成し、幼兒に興味ある事物現象の觀念を明白になすこゝに努力せねばならぬ。

四

最後に觀察に於て、大人の觀念に基いた説明、大人の概念から出發した理科教授をなすべきものでないこゝを繰返さねばならぬ。例へば馬は草を食ふ動物であるこゝか、牛は反芻するものであるこゝか、或は牛は偶蹄類で、馬は奇蹄類であるこゝか、更に牛も馬も有蹄類であるこゝか、哺乳類であるこゝか、いふが如き説明をなすのが幼稚園保育項目の觀察ではないこゝを十分理解せられんこゝを切望するのである。今日の動物學では、哺乳類ミいふ概念は、有蹄類ミいふ概念よりも高等な抽象的なものである。反芻類も草食獸も亦抽象せられた高等な概念である。馬の觀念ミ牛の觀念なきを比較して、その差異を取除き、共通せる點を抽象して出來た概念を表はす語である。かゝる概念は勿論具體的な觀念が明白でなくては眞に構成せられないのである。幼兒に牛ミ馬ミの實物を觀察させつゝ、その相異點を列擧させるこゝは出来る、しかし幼兒が牛ミ馬ミの類似點を列擧するこゝは不可能である。大人が牛も草を食ふであらう。馬も草を食ふだらう。牛ミ馬ミ草を食ふこゝが似てゐるではないか、説明すれば、成程ミ理解し得る位なものであ

る。満四五歳の幼児が牛と馬とを比較して、何れも草食するものであると抽象することは出来ない。第一に馬は草を食ふ、牛も草を食ふといふ断定をなすことが出来ない位である。具體的に牛は草を食つてゐることを観察すれば、「この牛は草を食つてゐる」「こいふ事實は明白になるが、全稱的にこの牛でも草を食ふといふ断定をなすことが出来ないのである。この點を十分理解して保育項目に於ける観察の實際に望まねばならぬ、幼稚園に於ける観察では常に、この

牛、この馬、この龜、この金魚、この雀と、いふやうに具體的な事物現象についての觀念を明白になし確實な知識を收得させることを本體させねばならぬ。一般的に牛は、馬は、龜は、金魚は、抽象的な知識を收得させるのではない。勿論幼児のこころであるから、一々「この牛は尾がさう、この馬はたてがみがさう」と、一々特稱するものではない、けれども幼児の觀念は常に個々の事物の具體的表象であるこころ。そして幼児の下す断定は全稱的な形態を具備してゐても、實は特稱的なものなるこころを十分心掛けて觀察の實際を指導せねばならぬ。幼児は特稱的具體的な觀

念から屢々觀察を反復することによつて、次第に全稱的な抽象性に富んだ觀念が構成せられ觀念の内包も外延も發展するのである。それであるから觀察に於ては同一の事物でも屢々觀察せしめて、その事物の觀念を明白になさしめると共に、特殊より普遍化し、一般化せしめ具體より漸次抽象せしめるやうに指導せねばならぬ。

而して觀察は單に偶然的な觀察だけに止めず、豫期的な觀察より研究的觀察に發展せしめるやうに指導せねばならぬ。外界の刺激に應じて兒童が感覺器官を働かすやうな受動的な觀察をなさしめるのみに止めず、進んで自發的な發動的な觀察をなさしめねばならぬ。これがため觀察物に對して疑問を起さしめ、また觀察點を指示するやうにせねばならぬ。觀察點の指示には、「どんなになつてゐるか。いくつあるか」等の如き疑問の形を以て幼児の注意を觀察點に集注させる工夫が肝要である。「かくく」になつてゐるか「こいふやうに、觀察の結果明白なるべきことを説示するが如きこころは成るべくさげねばならぬ。